

## 待降節第1主日 説教「時知る声」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年11月29日

### イザヤ書 2:1~5、マタイによる福音書 24:36~44

アドヴェントクランツに今年も火が灯され、クリスマスが近づいたことを思います。ただ、今年はかなり特殊な状況にあるために、例年通りのクリスマスというわけには参りません。そのため、視界不良の中で迎えなければならぬのが今年のクリスマスだとも言えるのでしょうか。けれども、もしそうであるならなおのこと、心静かに祈りの中にしっかりとイエス様を見つめ、クリスマスを迎えたいと思うのです。そして、この、心静かに、ということですが、イザヤが「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主は私たちに道を示される。私たちはその道を歩もう」と語るように、それは自分という小さな殻に閉じ籠もることではありません。共に主の山に登り、神の家に詣でること、つまり、こうして一緒に神様に礼拝を捧げることです。そして、私たちの進むべき方向は、この一人ではないと言うところで示されるものであり、ですから、私たちが指し示されたその方向を見失わず、目指す目的地に辿り着くためにも、私たちは自分自身の気持ちだけに溺れないように気をつけたいと思います。そして、それは、御子の降誕の出来事がその誕生をもって終わるものではなく、その先へと私たちを導くものであるからです。

それゆえ、今日のそれぞれの御言葉が語ることは、その先についてのことであり、つまり、それが終わりの日ということですが、つまりは、私たちの信仰にははっきりとした目的が与えられているということです。ですから、預言者イザヤは、その終末を迎えた時の光景を次のように語ります。「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」と。そして、イザヤがこう語るのには、私たちの終末に向かう歩みが野山を歩くハイキングのような牧歌的なものではないからです。その中には戦争があり、命の尊厳が脅かされる現実があり、まさに十戒が求めるものとは正反対のところに生きる私たちの姿を見ているからです。まただから、この旅を続けるためには、この共に、一緒にという視

点とそれを支える上での具体的な振る舞いが欠かせないことになるのです。そして、終末を迎えたとき、そこで人々が目にする光景が、回復された日常と、その中で営まれる平和な生活であります。このことはつまり、創世記の2章15節に「主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた」とあるように、罪から解放され、再び樂園へと連れ帰らされた人々の姿を、終わりの日に、私たちはそのように見るということです。それゆえ、多く人は、この御言葉から非戦平和、戦争放棄という、人類共通の理想、理念を読み取ったりもするのでしょうか。ですから、このイザヤ書2章4節の御言葉がニューヨークの国連本部前広場の壁に刻まれているのはそれゆえのことだということなのです。

そこで、この終わりについてイエス様はなんと仰るのか。「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである」と、つまり、終わりの日はいつ訪れるやもしれないものであるということです。それゆえ、イエス様は「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰ってこられるのか、あなたがたには分からないからである」と、道を誤らずにそこに辿り着くことを強く求めるのです。そして、このことはつまり、私たちがそれだけイエス様の強い思いの中に今あるということでもありますが、ですから、今年のクリスマスが視界不良の中で迎えなければならぬものだとすればなおのこと、私たちは、自分自身の姿をイエス様のこの思いの中に見出さなければなりません。つまりはそれが、目を覚まし、祈りの中に神様の御声に聞いていくということでもあるからです。それゆえ、イエス様が仰るこの「終わりの日」へと向かう私たちの歩みは、イエス様が「ノアの時と同じだからである」と語った上で、「洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲ってきて一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった」と終わりを迎えるまでの

人々の様子をこう語っているように、私たちの生きるこの日常と切り離されることはありません。つまり、私たちが今こうして生きていくこの日常の先に起こるものが終末という出来事であり、それゆえ、終わりの日は、このように私たちの生きる現実と深く関わるがゆえに理想で終わることはなく、そして、この現実で生きていくのがノアであったということです。

ですから、クリスマスを迎えるということの中で私たちに求められていることはそういう意味で、ノアの家族のように生きるのか、それとも、ノアの家族を馬鹿にした世の人々のように生きるのか、そのいずれを選ぶかということです。従って、その答えは明白です。恐らくは、躊躇なく、誰もがノアと同じ立場に立つことを選ぶのでしょう。それは、イエス様がここでも仰っているように、私たちは一人残され、惨めな思いをしたくはないからです。ですから、それにはノアと同じでなければならないのですが、ただ、私たちは、ノアのように箱舟建設を命じられたわけではありません。それゆえ、ここにまた、私たちの決断を曖昧にさせる理由があるのです。そして、私たちがしてそうさせるものはそれだけではありません。そもそもそのところで、目を覚ましていくということはどういうことなのでしょう。それについてイエス様が「家の主人は、泥棒が夜のいつ頃やってくるかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入れはしないだろう」と語ることから、一睡もせず夜通し緊張して毎日を生きなければならないことのように思えます。ただ、それは肉体的にも精神的にもとても負担の大きいことです。けれども、箱舟の建造について、ノアの払った労苦を思いますと、何もしないままに参りません。そこで、ノアのように成果を実感できればまだしも、ただ起きているだけ、いつ何が起ってもいいように見張っているだけ、それだけが私たちに求められているとしたら、果たしてそれは私たちに可能なことなのでしょう。しかし、それができないとしたら、今度は、私たちは、終わりを迎えたとき、神様に連れて行かれる側に立つのではなく、残される側に立つこととなります。ですから、ここでイエス様が目を覚ましていくなさいと仰ることは、そうすると私たちに向けられた救いの言葉ではなく、私たちの置かれた救いようもない現実を現していることにもなるのでしょ

うです。真面目に真剣にそれを仰っているのが私たちの主イエス様であるわけです。

そこで、もう一度、イエス様が「ノアの時と同じ」と仰っているところに立ち戻りたいのですが、イエス様が仰る「同じ」ということはどういうことなのでしょう。それは、このイエス様のお言葉を聞いた人々がノアと同じ感覚を持っていたということです。従って、イエス様が、この「同じ」というところから語ることは、人々の知的な理解ではなく共感にあるということです。つまり、「ああ、そうそう、それぞれ」といった具合に、打てば響くような人々の感覚に訴えているということです。そして、イエス様が弟子たちに向かってそのように語るのも、もちろん、弟子たちにはそれが分かる、ということが前提であったのでしょう。ただ、イエス様が求めることはいわゆる内輪話的なものではありません。宗教、信仰が成立する前提として、聖なるものとの交流、触れ合いを上げることができず、イエス様がここで仰っていることは、つまりはそういう根源的な事柄について「同じ」ということを語っているということです。ですから、私たちが目を覚ましていく、ということは、この「ノアと同じ」ところに立つということであり、同じように立って、しかも、ただ立つだけではなく、聖なる方に触れているという感覚をもって、イエス様のお言葉に聞いていくということです。まただから、ノアとイエス様が「これいいね、これ美味しいね」とそう言っているものを私たちもまた同じように「美味しいね、これいいね」とそう自然と同じことを口にするようになるのです。それゆえ、それは、意識してと言うことでもなく、また考え抜いてということでもありません。自然に口について出てくることであり、まただから、「そうそう」という100%の同意となって現されることにもなるのです。

しかし、そこで一つの疑問が湧いてきます。親子、夫婦であっても、そういうことはまれでありますし、出会ったばかりの恋人同士であれば、そういうことがあるのは分かりますが、しかし、それも長続きするものではありません。そこで、イエス様が「幼子のごとく」ということを仰っていることから、幼子のように無垢な姿を取り戻すことができればとも思いますが、ただ、私たちが思い描く幼子の姿には、ある種の理想化する意識が

働くものです。しかし、現実はどうか。そこで、今、私がみくにの子どもたちから言われていることを紹介したいのですが、それは、何人かの子どもたちが私個人についてに語ったことです。

今、ある子は、私のことを神様だと思っていて、また、ある子は、イエス様だと思っているそうです。そして、そういふ疑うことを知らないこの幼子の姿を皆さんは「幼子のごとく」とお考えになられているように思うのですが、もちろん、私もそうです。朝、「おやよう」と私が声をかけると、その子たちは、独特な表情を浮かべながら私の方を見てくれるからです。ですから、そういう子どもたちの姿に触れ、私自身もうれしく思いますし、この同じ目でイエス様と神様を見つめるものでありたいと、そう心の底から思わされるのです。けれども、その一方で、別の子どもたちは、これは今までになかった新しい動きなのですが、保護者が帰った後、私を試そうとして、「おい、牧師～～」とちょっかいをかけてくるのです。ただ、これはこれでかわいと思わされるのですが、それ以外の子どもたちはというとうどうでしょう。幼子であっても同じ姿をもって日々同じように過ごしているわけではありません。当然、その日の気分もあります。虫の居所がいいときも悪いときもありますし、その中で、犬のおまわりさんのように、なめることもあるのです。ただ、そもそものところで言えば、洪水が収まり、箱舟から出たノアに向かって神様が仰ったことは「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ」というこの一言でもありました。ですから、私に向かって悪態をつく子どもたちは、さもなりなんということでもあるのですが、ならば、「ノアと同じ」ように「100%の同意」を現すべく、目を覚ましているということはどういうことになるのでしょうか。

ノアも私たちも、与えられた役割を担いながら、それぞれの日常を生きているわけですから、それは当然のことですが、その日々の暮らしがまったく同じであろうはずはありません。そして、それは、ノアとの間だけでなく、私たちも同じです。私たちすべてはすべてにおいて同じではなく、ましてや、100%の同意など、100%あり得ないのです。しかし、終末は、そのような私たちの日々の暮らしの延長線上にあって、イエス様はそれゆえにここで「目を覚ましていなさい」と仰

るのです。そのため、私たちは、このように呼びかけられているわけですから、何とかそれを自分事として実行しようとするわけです。けれども、私たちはその試みに何度失敗したことでしょう。しかし、御心に背き、イエス様に背を向け、目を覚ましていないことを自覚しながら歩む日常を、こうして続けているのが主も御前に立つ私たちでもあるのです。こうして私たちは、罪人罪人と言われることになり慣れ、ですから、今年のように一端立ち止まることを強制的に求められることがなければ、終わりということについては、余り切迫感をもって聞くことはなかったようにも思うのです。けれども、今年とは違ふ、終わりという言葉がやけに胸に響き、そのため、罪人という言葉が気になって仕方ない、そこで、御言葉が「同じ」ということを求めているわけですから、それを自分事として一つやってみようと思気込んだりもするのです。けれども、それも長くは続かない、それは、やり慣れていないからでもあるのでしようが、ですから、どうしようどうしようと思ったりするのはそのためです。そして、そう思うのはまだ良くて、後は野となれ山となれ、もういい、どうにでもなれ、といった塩梅に自暴自棄になったりもするのです。ただし、そうしたことは、今始まったことではありません。今まであったことであり、ですから、そう思う人にとってはなおのこと、ノアの姿はまぶしく映り、ますます自信を失っていくことにもなるのでしよう。

そこで、誰もが考えることはそういう自分を変える、変えなければならぬということですが、ただ、これまで変えることのできなかつたものをどうして直ぐに変えることができるのでしょうか。そもものところでは、私たちが考えることは幼い頃から悪いものだと神様ご自身が仰っているわけですから、変えよう、変えたいと思うことは、今までずっとそうだったわけですから、おいそれと直ぐに変えることなどできるわけがありません。そして、そのことは神様もイエス様もよくご存じのことであり、ここのことはその上で私たちに語られているものでもあるのです。ですから、今私たちに求められていることは、今の自分を無理矢理変えようとするものではありません。イエス様がノアと同じと仰るように、同じように感じ、同じように行動しようとすることはとても大切なことではありませんが、国連広場前の通称イザヤの壁に記

されているこの御言葉が、それを壁に刻んだその当時と比べ、今の人々のその受け止め方がはまったく同じではないように、人の気持ちもそれゆえの行動も必ず変わるものなのです。ましてや、ノアと同じと言われても、私たちがその気持ちや考えを分かるはずもなく、ですから、イエス様がノアのコピーのように同じ、同じ、ということが私たちに求められているとしたら、それはそもそものところであり得ないことを求めておられることにもなるのでしょうか。しかし、もちろん、そうではない。ではそうではないなら、何なのか。それを知るためには、私たちは、自分がどこに生きているかをもう一度見つめ直し、もっと素直に御言葉に聞くべきなのではないでしょうか。

目を覚ましていなさいとのイエス様の言葉を私たちはこれまで何回聞いてきたのでしょうか。そして、それを聞きながら応えられずにいることに何度負い目を感じてきたことでしょうか。今年も特にそれを強く感じたりもするのですが、それは、今まで曖昧であった終わりというものも少しだけ具体性を持って感じるようになったからです。でも、イエス様がそう仰るのは、今初めてのことはありません。昨年も一昨年も、私たちがもつと調子のいいときにあっても同じでした。ですから、調子が良くなれば、きっとまた私たちは忘れてしまうのでしょうか。でも、繰り返し何度もこの「目を覚ましていなさい」というイエス様のお言葉をこれからも聞き続けるのが私たちであるのです。そして、その私たちが今年もこの厳しい状況の中にあって、クリスマスを迎えようとしているのです。ただ、それがいつも通りというわけにはいかない、私たちのこの時のモヤモヤした気持ちは、それゆえのことでもあるのでしょうか。そして、このモヤモヤがまた私たちに何かをすること、何かをし続けようとするところへの拘りを強めさせたりもするのでしょうか。けれども、何かをしなければ気がすまない私たちのこの拘りが、終わりへと向かう、私たちの気持ちを新たなものに向かわせることはありません。むしろ、その反対に、この時のモヤモヤと何かをすることへの拘りが私たちを逆方向に連れて行ったりもするのでしょうか。そして、それは負い目であったり、不自由さであったりということでもあるのですが、けれども、そうであるからこそ、イエス様は「目を覚ましていなさい」と仰るのです。それは、何かをしなければなら

という、この呪縛から私たちを解放するためであり、また、そこから新たに始まるのが、私たちの歩みでもあるからです。そして、それは、主が私たちと共にいてくださっているからであり、そのためにまた、私たちは、この主と共に終わりまでを導かれることになるからです。私たちが何かをしたから、何かができるから、だから、主イエスは私たちと共にいてくださるというのではなくて、「それでも」主は私たちと共にいてくださっているのです。つまり、何かをすることで主が共にあるのではなく、何がなくても、主と私たちは「共にある」、「共にいる」のです。ですから、「そうそう、そうだね」という 100%の同意は、この「いる」というところで約束されているものであり、そして、それは、イザヤがその最後のところで「ヤコブの家よ、光の中を歩もう」と語るように、「いる」ということは、私たちがすでに光の中を歩んでいるからです。まただから、こうして御言葉に聞いている私たちは、神様とイエス様の言葉に繋がって生きることを大切にすることです。

ですから、今日のそれぞれの御言葉が私たちに語ることは、御言葉に繋がって生きることの大切さです。繋がっているからこそ、私たちはその言葉を信じていることができるわけですし、ここでイザヤの言葉とイエス様のそのお言葉が明らかにするように、御言葉に繋がって、御言葉を大切にすることであるからこそ、戦争の記憶覚めやらぬその時も、戦後 75 年が経ち、階段の踊り場に立ち、足踏みするしかないこの時も、主の言葉につながり、その言葉を大切にすることである私たちは、同じように同じ気持ちで明日という日を希望の中に迎えることができるのです。そして、それは、人類の代表となったノアに向かって、神様が「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。私は、この度したように生き物をことごとく撃つことは二度とすまい。地が続く限り、種まきも刈り入れも、寒さも暑さも、夏も冬も、昼も夜も、止むことはない」と語る、ご御言葉の上に立つことであり、それゆえ、世界の秩序が御心によって保たれていると語るこの御言葉に繋がって生きるなら、私たちは、終わりの日、喜びの中に主と出会うことになるのです。祈ります。